

御礼の言葉

岩手県立山田高等学校

校長 関川 繁雄

この度は、大阪府職員の皆様を始め、大阪府民の皆様のご好意により、本校2学年生徒に関西方面(大阪・奈良・京都)修学旅行の機会を与えて頂き、誠にありがとうございます。

岩手の高校生にとりまして、日本文化の薫りが漂う関西方面への修学旅行は、高校生活最高の思い出であります。東日本大震災で当時1学年生徒2名が行方不明(4月以降に犠牲が確認される)となり、5月から7月にかけて今年度の修学旅行実施が危ぶまれた時に、大阪府より今回のご提案が岩手に届き、意を決して応募し、幸いにも修学旅行を実施できる運びになりました。

三陸海岸のほぼ中央に位置する岩手県山田町は、天然の良港山田湾に恵まれ、古くから漁業や海運を中心に栄えてきた街です。近年は、山田湾内でのホタテやカキの養殖漁業、織笠川のサケ漁が有名です。山田町内陸部は、椎茸栽培も盛んで、松茸の産地でもあります。そのような山田町内唯一の高校が、県立山田高校です。

皆様はテレビや新聞報道等により、3月11日に発生した東日本大震災の悲惨な光景をご覧になった方も多いと思います。山田町は、海沿いの地域が10数mの津波にのまれ、町の中心部が津波により発生した火災に遭い、大きな被害を受けました。現在在籍している生徒215名の内、岩手県から示された被災認定「住居の全壊半壊、住居の全焼半焼、津波による住居流失、収入の著しい減少」に該当する被災生徒は136名に達します。また、現在仮設住宅で生活している生徒は、79名おります。

震災直後、高台に在る山田高校は避難所となり、一時は町民約1,300人が体育館等に避難しておりました。電気・水道・固定電話・携帯電話等が止まり、JR山田線や国道45号線はあちこちで寸断され、食料は少なく雪が降る中で空腹と寒さに耐えながら、家族や親戚・友人の安否が気になるものの、どうにもならないもどかしい生活が3日間続きました。この間、山田町内陸部の方々の握ったおにぎりを運ぶ車に続き、やがて町外から自衛隊を始めとする救援の車や、水・毛布・食料等の救援物資を積んだ車が、細い山道を通り本校に到着するようになりました。日本各地の被害情報に驚きながらも、生活物資の到着でやっと一安心したことを今でも覚えております。

町内医療機関は、県立山田病院や個人開業医院が壊滅状態でした。やがて、日本赤十字(兵庫県支部)医療チームが本校に到着、教室を診察室・治療室・薬局・病室等に使用し、本格的な医療行為が始まりました。避難所の体育館では、看護師やボランティアの方々が被災者の心のケアにあたり、それにより心身の健康や平常心を取り戻した方も多くいたと聞いております。

4月初め、校庭には自衛隊トラックが数十台、給水車が数十台、隊員居住テントが数十張、避難者入浴用(風呂男女別)テントが数張、炊き出し用調理テント数張が建ち並び、山田町内の支援基地の役割を果たしました。その後、トラック・給水車・テントの数は徐々に減り、日本赤十字医療チームや自衛隊の方々は7月上旬までに本校から他の活動場所に移動し、避難者は町内各所にできた仮設住宅への入居が進み、8月31日に避難所(県内学校施設最後)を閉鎖しております。

避難所である山田高校は、県外(埼玉県)の警察官の方々が常駐し警備にあたる中、4月下旬に始業式・入学式を行い、約1ヶ月遅れて授業を再開しました。本校教育の推進において、今後数年間、大震災による地域経済や社会基盤の変化、個々の厳しい生活環境を踏まえなければなりません。落ち着きある充実した高校教育を心がけ、学習・部活動に熱心に取り組ませ、進路希望の達成に向けて、決して焦らず地道に指導して参ります。

最後になりましたが、今回の企画・運営に携わってられました大阪府職員の皆様、震災以降、日本は元より世界中からお寄せ頂きましたご支援に対し、この場をお借りして心より感謝申し上げます。いつの日にか必ず恩返しをすることをお約束しまして、御礼のご挨拶といたします。